

令和6年度現代芸術の国際展部会 in 横浜市 開催報告

現代芸術の国際展部会は、国内各地で開催されている現代芸術の国際展に携わる自治体や団体の職員が、課題やノウハウを共有することにより各国際展の発展的な継続開催を目指し、さらには各開催都市の創造都市政策のさらなる実現を目指している。

【全体概要】

- 令和6年度の部会は、横浜市にて第8回横浜トリエンナーレ会期中に2日間の日程で開催し、第1部は公開型の基調講演やクロストーク、第2部は担当者同士で現代芸術の国際展開催における課題やノウハウの共有など意見交換を行った。
- 担当者ミーティング後は、第8回横浜トリエンナーレを巡るエクスカージョンも合わせて実施した。

【担当者ミーティング概要】

開催日時	令和6(2024)年5月23日(木)13:30~18:00 5月24日(金)10:00~12:00
開催方法	横浜市(横浜市役所アトリウム他)及びオンライン(ハイブリッド開催)
主催	横浜市
共催	創造都市ネットワーク日本(CCNJ)、文化庁
参加人数	34名(現地26名、オンライン8名)※事務局含む
参加自治体・団体数	自治体:10、団体:1 ※事務局除く
プログラム	<input type="checkbox"/> 開会挨拶 ・永井 由香氏(横浜市 にぎわいスポーツ文化局 文化芸術創造都市推進部長) ・児玉 大輔氏(文化庁 参事官(生活文化創造担当)) <input type="checkbox"/> 第1部 基調講演及びクロストーク ※一般公開形式 (1)基調講演 「第8回横浜トリエンナーレの取組」 ・蔵屋 美香氏(横浜トリエンナーレ総合ディレクター/横浜美術館館長) (2)クロストーク 「アートが心にもたらす効果」 ・藤本 敦也氏(横浜市立大学研究・産学連携推進センター特任教授) ・川畑 秀明氏(慶應義塾大学文学部教授) ・蔵屋 美香氏(横浜トリエンナーレ総合ディレクター/横浜美術館館長) <input type="checkbox"/> 第2部 事例紹介/担当者ミーティング (1)事例紹介 「横浜トリエンナーレにおける事業評価の取り組み」 (2)ディスカッション <input type="checkbox"/> 総括 ・佐々木雅幸氏(CCNJ 顧問)

【担当者ミーティング各プログラム概要（要旨）】

1. 第1部 基調講演及びクロストーク

(1) 基調講演 「第8回横浜トリエンナーレの取組」

／蔵屋 美香氏（横浜トリエンナーレ総合ディレクター／横浜美術館館長）

- ・美術大学で油絵、大学院で美術史を学び、その後東京国立近代美術館に勤務したのちにコロナ禍の2020年4月に横浜美術館に着任。第7回展は着任後3か月での開幕だったためほぼ出来上がったものからの関わりであったが、今回の第8回展は最初から総合ディレクターとして関わることになり課題の抽出から構想、各取り組みを実施した。本日は第8回展の取り組みについて話をする。
- ・現在国内にはさまざまな芸術祭が開催されている中、横浜トリエンナーレは2001年に始まった。改めて横浜トリエンナーレの特徴や他芸術祭の違いを整理することから始めた。
- ・第一に、3年に1度横浜を舞台に開催されるアートの祭典であること、次に国内最古級及び規模が大きいこと、そして前回展から改めて豊かな国際性を大切にしていること、最後に美術館をメイン会場として使っていることである。
- ・豊かな国際性については、前回展から国内の先陣を切って海外からアーティスティックディレクターを招聘し、多様性の観点からさまざまな国や地域の文化の声を拾うことを重要視し、世界31の国や地域から93組のアーティストが参加している。
- ・美術館をメイン会場として使っていることについて、経緯は2001年のスタート時は国の事業として美術館は使わず、まちの古い倉庫や面白いスポットに作品を展開していたが2011年から市が主催するようになり市事業の位置づけとして美術館をメイン会場として使っている。しかし2011年までは、まちなかへの展開からまち歩きの楽しさがあつた、美術館会場だけだと敷居が高い、通常の展覧会の少し大きな催しものになっているのはいないか等の声を聞くようになった。
- ・そこで、改めて美術館をメイン会場にする価値について考えた。地域（地方）型芸術祭の鑑賞経験からまちへ展開することはまち歩きの楽しさがあるが、足の悪い方や車いす、ベビーカー使用の方には大変だと感じ、美術館をメイン会場にすることにより何より安心した鑑賞環境があり一か所で多くの作品を観ること（優しい鑑賞環境）ができると考えた。
- ・然れど、まちへの展開（まち歩き）を期待する声もあるため、美術館会場は充実させながら、もう一度まちに広がるトリエンナーレができないかを模索した。ただ、横浜市の都市中心部の開発が進み、古いビルや倉庫がきれいに手入れされた結果、短期間安価で会場を借りることができなくなっていた。そんな中、旧第一銀行横浜支店、地域のアート拠点であるNPO法人BankART1929に協力頂いたBankART KAIKO、クイーンズスクエア横浜、元町・中華街駅（みなとみらい線）構内への展示が実現できた。しかし、まだまちに広がった実感を持つのは難しいと感じ、横浜で10年、15年活動を続けているアート拠点の方々へ相談し、今回の横浜トリエンナーレのテーマである『野草：いま、ここで生きてる』を共通テーマに企画頂けることとなった。結果、BankART STATION、黄金町エリアマネジメントセンター、象の鼻テラス、急な坂スタジオ、NEWoMan 横浜、横浜マリントワーが手を挙げていただき、美術館会場の良さも生かしながら地域の拠点によるまちに広がる作品群も実現することができた。そしてこれら作品群がまちなかにダイブするイメージで『アートもりもり！』と称し、アーティスティックディレクタープロデュース部と各拠点プロ

デュース部の二つを併せて大きな横浜トリエンナーレと呼んでいる。

- このように美術館を中心とするアーティスティックディレクターを海外から招くパートと地域拠点のパートの 2 つの柱を持ち国際性と地域性を兼ね備えたトリエンナーレとなった。
- 今回の横浜トリエンナーレの特徴として前述した体制とタッチポイントを増やす取り組みが上げられる。タッチポイントを増やす取り組みとして、美術館内含めの無料展示をしっかりと宣伝することにより日常の中にアートに触れるポイントを増やす。次に作品解説を各作品 300 字程度で専門用語を使わず、文字を大きくし読みやすくする。そして小さいお子さんを対象とした休憩スペースや予約なしで参加可能なワークショップスペースとしてこどものアートひろば「はらっば」を美術館内に設置。最後に市内小中高の 650 校にパンフレットを配布し、現代アートの良質な入門機能した取り組みを実施した。
- ここから今回の展覧会の内容について説明する。アーティスティックディレクターに中国、北京在中のリウ・ディンとキャロル・インホワ・ルーを任命、テーマは『野草：いま、ここで生きてる』である。「野草」はアーティスティックディレクターが中国の作家、魯迅の詩集から引用したもので魯迅は「野草」という詩集の中で、つらいときこそ小さな希望を見つけて、私たち一人一人が小さな積み重ねによって世界に希望を見いだそうと訴えており、その言葉を手掛かりに展覧会を作っている。魯迅の「野草」からアーティスティックディレクターが引き出したテーマはいくつかあるが、三つに整理した。
- 一つ目は「大変なときこそ創造力が花開く」、アーティストは大変で辛いときこそクリエイションの力で生き延びようとする力が湧く。そこで生み出されたクリエイションの軌跡を紹介している。
- 二つ目は「別の生き方を探そう」、大量生産大量消費の文化が染みついた昨今によく考えると要らない物（本当に欲しいものではなくインフルエンサーのお勧めなど）を買うために働いて人生が終わっていく生き方以外の生き方でお金を使って買うのではなく必要なものを探していくことができないかのヒントになる作品を展示している。
- 三つ目は「わたしたちが世界を変える」で大変な世の中は政治家や有名人など特別な人が変えるのではなく、私たち一人ひとりの日常の中の積み重ねがいつの間にか世界を良い方向に向かわせるというメッセージを伝えている作品群である。
- 最後にティーンエイジャーへのアプローチについては、市内の小・中学校 高等学校 650 校にパンフレットを配布、小学校低学年はすごろく形式、4 年生から中学 3 年生はゲーム攻略形式、高校生はアーティストのインタビュー記事掲載等、年代によってアプローチ方法を変えている。
- また、ティーンエイジャー向けの講演『親子できたえる「考える力」：現代アートを通して、横浜トリエンナーレでできること』を開催、印象派は分かりやすく現代美術は分かりづらいのか、そもそも同じアートなのに見方は本当に違うのかという点に絞ってレクチャーを行った。
- 現代アート作品は、「絵画や彫刻のような普段見慣れたモノではない作品が多い」、「必ずしも綺麗な作品ばかりでない」、「観察する、考える、知識を得る行為の内、知識を得

るというリサーチ部分が重要」であり、現在の社会問題を取り扱う作品が多く、観察して知識を得て学び、自分で考え人と対話して表現するプロセスを鍛える好適な媒体である。

- ・アートは、観ると癒されて励まされる作品から、現代アートのように綺麗ではないが考えさせられる作品等、様々な種類があり。今回の横浜トリエンナーレは現代アート作品が多く展示されている。現代アート作品を単純に難しい、分からないと言ってはもったいない。むしろ文部科学省の学習指導要領や高校入試等で目標とされている自分で観察し学び、考え、表現し課題や問題に対して対策を講じ切り開いていく力を育くむことができる媒体であることを広く丁寧に説明していくことが重要であると考え。

(2) クロストーク 「アートが心にもたらす効果」

／藤本 敦也氏（横浜市立大学研究・産学連携推進センター特任教授）

／川畑 秀明氏（慶應義塾大学文学部教授）

／蔵屋 美香氏（横浜トリエンナーレ総合ディレクター／横浜美術館館長）

(進行役)

- ・今回の横浜トリエンナーレでは横浜トリエンナーレ組織委員会と横浜市立大学のMind1020Lab（マインズテントウエンティラボ）による、『アートが心にもたらす効果』を検証する実証実験が行われている。藤本氏と川畑氏より実証実験について紹介頂いた後、蔵屋氏を交えたクロストークを行う。

(藤本)

- ・Mind1020Lab（本拠点）は若者の生きづらさを解消し高いウェルビーイングを実現するメタケアシティ共創拠点として文部科学省のCOI-NEXT 本格型に採択された事業で、研究だけでなく企業に参画頂き、研究成果の社会実装として生きづらさを解消するソリューションを創出すべく活動している。
- ・ラボではまず心の不調の早期発見を目指し、そこから回復プロセスや自分の守り方を研究している。本拠点研究の特徴としてゲームや漫画、アートなど日常の中にあるものを取り入れながら自然と心が整うプロセスも目指していることがあげられる。
- ・そのほか「若者のこころ研究会」や「メタバース学校」、「メタバース診療所」などのプロジェクトを実施しており、パーソナライズ医療の文脈やオンラインコンテンツならではのやりとり方法の柔軟さからデジタルを積極的に活用している。
- ・そして、ゲームや漫画やアートなどのコンテンツが心に与える影響の効果検証についても研究を行っている。
- ・本実証実験の、最終的な狙いはアートの心のレジリエンスへの関わり方や、研究成果を用いたソリューションやコンテンツの創出であるが、その基礎となる「アートは気分変動効果を有するのか」について今回は検証している。
- ・実施について場所は横浜美術館、期間3日間、参加は合計100人弱。方法については、鑑賞前と後の差異を測るため、ガーミン（腕時計型生体センサ）による心拍データとアンケート回答結果から分析をした。

(川畑)

- ・今回の実証実験結果の速報と共にアートが心にもたらす効果について話をする。
- ・昨今、美術鑑賞や創作表現が日常生活に良い影響を及ぼしていることや展示型鑑賞、対話型鑑賞の効果など様々な研究で明らかになっている中、好影響のメカニズムやウェルビーイングへのつながりについて研究中である。
- ・具体的には、アート活動前後の気分の変化などを検証していく中でアート活動前のポジティブな感情がその活動の体験の質、楽しさで幸福を感じたりすることを介して、その活動後のポジティブな感情をより強めていくことが分かってきた。今回の計測でもグラフ化した速報値分析として鑑賞の体験の質が高いほど、事後のポジティブ感情が高まっている。さらに、事後のネガティブ感情が高まらないように抑えられていることが分かってきた。
- ・心理学の世界では最近、ポジティブ心理学がブームとなっており、ポジティブな感情をきちんと基礎づけ、ポジティブな感情を持つことがクリエイティビティを高め、ウェルビーイングにも強く影響する。
- ・現代アートを論じる中で「考えるな、感じろ」と言うことがあるが、アートにおいては感情の迷子になってしまうので「感じて、考えられる」ようにするため文脈や情報の提供が重要になると考える。また、最近タイトル付け方による作品の理解度や鑑賞時の立ち位置、鑑賞ルート等鑑賞者の行動パターンの研究が進み、実験の結果を展示構成検討の1つの要素とし鑑賞者の体験の質を上げることができると等、美術館、博物館と鑑賞者研究が相互に有機的な連携を取れたら良いと考える。

[クロストーク]

(蔵屋)

- ・このような調査研究が重要になっている背景としてアート事業に多くのお金を使う意味を問われ続けているからであり、これまで経験則で学力や心の健康に役立つ、地域にお金が落ちる等語られてきたが、科学の力で数値をして示されようとしている。
- ・今回の計測は一つ一つの作品鑑賞に対しての検証であるが、鑑賞環境は他者の行動や解説の付け方等影響する中での相互の満足感やポジティブ感情の高まりについての将来像はあるか。

(川畑)

- ・研究から分かっていることは文脈が重要であり、鑑賞者自らが文脈に気付けるように伝えることができることを期待している。そしてそのような展示空間は鑑賞者が時間を掛けて観ることができるようになるのではないかと考える。

(藤本)

- ・本拠点の展望になるが、様々なアート作品や展示場所でデータをとり、生きづらさを感じている方、それぞれに合った展覧会や美術館を紹介するパーソナライズされたアート鑑賞の提供などを検討していきたい。

(川畑)

- ・また、アートは場づくりの場でもあるため、アートコミュニケーションを通して高齢者の孤独や孤立の解決に挑戦しており、文化的処方を通じて心の健康を保つことができれば良い。それは美術館にとっても良い形と考える。

(蔵屋)

- これまでの話は非常に心強い。日本ではこの20年アート事業に対する予算が厳しくなってきた中、事業継続のために地域への経済波及効果やチケット収入、集客数が目標だった。これらの目標を達成することは重要であるが、これらの目標だけで評価を続けるとコンサートなどの大規模な集客イベントなどと比較されアート事業の立場が弱くなってしまった。
- それが経済波及効果等と違う心理的側面からのエビデンスが集まればアート事業の意義や必要性について説明する大きな武器となると考える。
- 今回の実証実験で重要なことは、幸福感が単純なハッピーではないことでアート鑑賞を通して視野が広がるなど自分で考える経験をするに対する評価方法を定めることである。また、次の時代を生き抜くためのアートの価値についてのバックボーンを得られることは非常に重要である。

(進行役)

- 本実証実験の速報値について今回のトリエンナーレ鑑賞者の幸福感における結果はどうか。

(川畑)

- 今回のトリエンナーレの作品は鑑賞者に訴える作品が多く、鑑賞者に考えてもらう趣旨であり、鑑賞者はしっかり考えることができ、さらに考えたことを自覚できたことが自分がここに来て良かったとポジティブ感情につながった結果と解釈した。

2. 第2部 事例紹介／担当者ミーティング

- 横浜市より事例紹介として「横浜トリエンナーレにおける事業評価の取り組み」について説明があった。
- その後、ディスカッションテーマ「現代芸術の国際展開催における事業評価検証について」昨年度、札幌国際芸術祭2024会期中に札幌市にて開催した担当者ミーティングの振り返りや参加自治体から横浜市の事業評価の取り組みについての質疑や各自治体の課題感の共有や今度の取組等、意見交換が行われた。

【総括要旨】

／佐々木雅幸氏 (CCNJ 顧問)

- 横浜トリエンナーレ開催当初は作品が街中に展開しウォーターフロントの衰退現象の再生を担っていたが、美術館が会場のメインとなってからは美術館が持つ教育文化施設や学習施設の役割から市民の対象の幅が広がっている。
- 私は、これまで経済効果を産業連関表で測る形をとってきたが、今回の担当者ミーティングに参加し現在は社会的価値や精神的価値とアート鑑賞や創作活動の関係を測るところまで前進してきたことが良く分かった。
- 昨年度開催した札幌国際芸術祭の「イニシアティブ・パートナー」の取り組みのように各地域に適した取り組みが出てきており、札幌市、横浜市、愛知県などは動員力のある都市型、瀬戸内国際芸術祭や大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ、奥能登国際芸術祭などは地方型（農村型）で都市型と違うアプローチが大事だと思う。具体的には若い世代

の移住者が増えてくるところにポイントが置かれているであろう。よって各地域 KPI の設定方法は各地域によって変化していくと感じた。

【エクスカージョン】

1. エクスカージョン①

開催日時：令和6年5月23日(木)17:30～18:00

会 場：横浜マリントワー会場

2. エクスカージョン②

開催日時：令和6年5月24日(金)10:00～12:00

会 場：横浜美術館会場

3. アフターツアー（希望者のみ）

開催日時：令和6年5月24日(金)13:30～15:00

会 場：BankART KAIKO 会場／旧第一銀行横浜支店会場

